
傘

白鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傘

【ZZマーク】

ZZ0795

【作者名】

白鳥

【あらすじ】

ある雨の日、喫茶店に一人の男が訪れる。

「不思議でしょう」

男は微かに笑い、問いかける。他に何と云つたらいいのか解らず、私は答える。

「不思議、ですね」

私が店主を勤める喫茶店に、見るからにみすぼらしく、その上ずぶ濡れの男が入ってきたのは、ある雨の日の、正午前のことだった。激しくザアザアと降るわけでもなく、かといってシトシトと表現するには中途半端な、そんな雨だった。

「まあ、いらっしゃいませ。お客様、傘も差さずこのよつやな雨の中を」

「いや失礼。雨宿りをせてもらえませんかな。ついでに熱い珈琲を

一つ

「ついでだなんて。ヒドイお客様だこと」

歳は四十、いやもう五十に近いのだろうか。年齢の良く解りぬ面貌をした男は何も答えずにただ微笑んで、茶色いコードから雨水を垂らしながら、誰も居ないカウンター席に座つた。

「空いていますな」

「こんな日に、開店して何日も経つてないよそ者の喫茶店で雨宿りしようなんて醉狂な人はいませんわ」

この辺りは新興住宅などが比較的少なく、住民はストレンジャーに敏感である。成る程、と呴いて男は興味深げに店内を見渡した。私は構わずに、真新しいポットで湯を注ぐ。

私が喫茶店を開いたのに、余り深い理由はない。強いて云えば、資金が有り、珈琲が好きだつたからか。とにかく一年前に夫が急逝し、多額の保険金が振り込まれた時、それまで魂が抜け落ちたように何も考えられなかつたのに突然、「退職したら一人で喫茶店を開こう」と云つて、いた夫の言葉を急に思い出したのである。夫は、私の淹れる珈琲が大好きだつた。

「どうぞ」

「有難う。……ふむ、良い香りだ」

男は満足気に珈琲に鼻を近づける。その仕草が一瞬だけ夫の思い出と重なつたが、すぐに氣のせいだと思い直した。夫とこの男は似ても似つかぬ。

「中々良いですな。私は珈琲にはつるさい方なんだが、雨宿りついでには勿体無い程だよ」

「お気に召したのなら良かつたですわ」

先程から少し嫌味っぽい男である。

「いやいや。それにもここは一人で?」

「アルバイトの子が一人おりますが、この通り暇なものですから私一人でも全く問題ないんです」

「成る程。若いのに偉いものだ。そうだ、退屈しのぎにちょっと私の話を聞いてくれませんか」

「何ですか?」

「私が何故傘も差さずに出歩いていたのかお知りになりたいですう?」

「ええ、まあ……」

男はおもむろに話を始めた。半分ほど残された珈琲は、まだ微かに白くうねる湯気を放つていた。

「実は私は物書きなのです。一時期はそこそこ売れていたんですがね、今じゃもう誰も知らんでしょうね。まあともかく、先日まで地

方紙の連載小説を一本、書かせてもらつてたんですね。それが突然打ち切りになつてしまつた。なんでも前々から連載を依頼していた若手作家がやつとこを快諾したみたいでね。それで私はお払い箱です。まあ向こうはそうは言わなんだが

「それは……ひどいわ」

男は美味そうに珈琲を啜つてから、話を続けた。

「この業界じゃあ良くある話ですよ。私だって若い頃は先達に色々失礼をしたもので。しかしね、この歳で唯一の収入源だった連載が切られるとい、独り身の私にはどうにも……。それでいつそのこと

「いつそのこと?」

男の顔が急に老け込んで見えた。窓の向こうでは、雨が相変わらず中途半端な強さで降り続いている。

「死のう、と。私にはもう生きていいく自信が無くなつていきました」何を言い出すかと思えば、そのような話を聞かされてもどうしようもない。私は少し腹が立つた。

「それで傘も持たず死に場所でも探していたんですか」

思わず強い口調になつてしまつたせいか、男はこぢらを向いて少し驚いた表情をした。

「いやあ、例え死に場所を探すとしても、傘は差しますな。それに、私にもう死ぬ気はありません」

「はあ」

拍子抜けしてしまい間抜けな相槌を打つてしまつた。一体この男は何を言いたいのか。先程まで死ぬと言つておきながら、再び口を開けばもう死ぬ気はない、ときた。話が滅茶苦茶である。

「私はどうも優柔不斷でして。どうせ死ぬならポツクリ逝きたいでしょ。苦しまずに死ぬにはどうしたらいいか解らず、数日間悩んでおつたのです。今朝もね、起きてからずつとそんなことを考えながら床の間から、雨に濡れた庭を見るとも無く見ていたのですが、そこに傘を差した……妻がいたのです」

「妻? さつきは独り身つて……」

「ええ、私の妻は十五年前に交通事故で亡くなつた。それが、いた。
綺麗な服を着て、綺麗な傘を差してね」

窓の向こうでは、雨が相変わらず中途半端な強さで降り続けていた。私はありもしないことを淡々と語る男が、少し気味悪くなつていた。

「妻は私に向かつて微笑んでた。私も、その笑顔につられるように妻のもとまで歩いていった。妻は私に傘を渡して、ただ一言、少し歩きましょう、と云つたんだ。ふふ、相合傘など学生の時以来だつたよ。歩きながら、私は妻に色々なことを話した。妻が死んだときには書いていた小説が賞をとつたこと、昨日作った料理が思いのほか美味かつたこと、打ち切られた小説の結末、そして死のうと思つていること。妻は黙つて全部、全部聞いてくれた。気が付くと、十五年前、妻の命が絶たれた交通事故のあつた交差点にいたんだ。妻のほうを向くと、交差点の中央、ちょうど妻が倒れていた辺り、をじつと見ていた。十年連れ添つて一度も見たことの無いような悲しい顔をして。そして私に云つた

『死なないで』

「私の胸を占めていた黒い靄のような何かが消えた感覺だつた。気が付いたら、妻はいなくなつていて私は頭からつま先までずぶ濡れだつたよ。それで取りあえず近くにあつた喫茶店に駆け込んだわけです。どうです、不思議でしょ?」

「不思議、ですね。まあ怪談なんかでは良くある様な話ですけど」「信じてもらえますか」

「そうですねえ。信じられないですが……、私が信じようと信じなかろうと貴方には余り意味を持たないことなのでしょう?」

男は乾いた笑い声をあげた。何も憂うことが無い人のあげるよう

な、聞いていて気持ちの良い笑い声だった。

「こりゃあ、一本とられましたな。貴方のまつが一枚上手のようだ。
変な話をしてすみませんでしたな」

「退屈しのぎにはちょうど良かつたですわ」

「ふふ、そうですか。いや美味しい珈琲を飲ませてもらつたよ。御馳
走様」

代金を払い、男は出て行く。私はなんとなくその後ろ姿を田で追
ついていたが、心なしか、左肩のほうが右肩より濡れているような気
がした。男が扉を開けると、取り付けてある鈴がちりん、と鳴つた。

「晴れましたな」

いつの間に、晴れたのだな。店内にも日が差してきた。机や椅子
に反射する光が、何故だかいつもより神秘的に見える。男はもう
一度御馳走様、と云つた。

「またのご来店お待ちしております」

「……ああ

私は男が出て行つてからじまくして、外に出た。雨の後の晴れ
は、好きだ。深呼吸してから、私は田の光に目を細めた。

その喫茶店の名は「相合傘」。晴れの日も勿論、営業している。

(後書き)

駄文ですが、お許し下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8079s/>

傘

2011年6月23日16時41分発行